

ゴビズキンカモメ研究の概説

何芬奇¹・David Melville²・邢小軍³・任永奇³

1 中国科学院動物研究所

2 Dovrdaie, R. D. 2 Wakefeld

3 鄂尔多斯国家級自然保護区

訳 福井和二

摘要；ゴビズキンカモメ (遺鷗 *Larus relictus*) が確認されて以来 30 余年の世界における研究結果とゴビズキンカモメの観察確認状況の概況を述べる。総じて、述べれば、ゴビズキンカモメは蒙古高原において繁殖分布し、荒漠、荒涼とした環境条件下に生息する典型的な鳥類で、比較的独立した 4 つの個体群があり、湖心の島で繁殖している。ゴビズキンカモメの当歳幼鳥は放射状に拡散し、その主要な越冬地、越冬群は今日なお不明である。気象の変動により繁殖地の環境が不安定で、それによりゴビズキンカモメの繁殖動態の大きく変化する重要な要因となっている。

ゴビズキンカモメ (遺鷗 *Larus relictus*) は我が国の国家一級保護野生動物である。ゴビズキンカモメは個体数が甚だ少なく、IUCN によるレッドデータブックに絶滅危惧種としてランクされるほか、《絶滅危惧野生動物国際貿易条約》(CITES 条約)、《渡り鳥条約》(NSC) など幾つかの条約に該当している種である¹¹⁻⁵⁾。

1. ゴビズキンカモメ発見の略歴

ゴビズキンカモメは人類に最もおそく認められた種の一つで、標本の最も古い採集記録はスエーデンの鳥類学者 E. Lonnberg が 1929 年に南ゴビ砂漠中部の、我が国内蒙古自治区最西端の額濟納旗の葱多尔で採集した性別不明のものが第 1 号で、ニシズグロカモメ (黒頭鷗 地中海分布) の新亜種 *Larus melanocephalus relictus*¹⁶⁾ とされた。しかし、これと同時に Lonnberg はこの標本が科学界で知られていない新種のカモメ類であることも推測しており、不明瞭ながら問題提起として *Larus relictus* なる種名を用い唯一 1 号標本としながら最終的には直接結論を下していない¹⁷⁾。

その後数十年国際鳥類学会での分類帰属問題で様々な意見論争があり、Dement' yev と Gladkov はチャガシラカモメ (棕頭鷗 *Larus brunnicephalus*) の変型とし¹⁸⁾；Vaurie はオオズグロカモメ (漁鷗 *Larus ichthyaetus*) とチャガシラカモメの雑種と推測した¹⁹⁾。標本と生態関係資料不足のためこの問題は長年未解決のままであった。

1971 年、前ソ連の鳥類学者 Auezov によってカザフスタン阿拉湖 (Lake Ala) で小規模な繁殖個体群を発見し、標本を採集して *Larus relictus* とした¹¹⁰⁾。並びに継続して阿拉湖のゴビズキンカモメ繁殖群について報告している¹¹¹⁻¹³⁾。

2. 国外ゴビズキンカモメの研究

ひとたびゴビズキンカモメが独立種として確認されると、Potapov は直ちにロシア極東のチタ地区の托瑞湖 (Lake Torey) においてかつて見られたチャガシラカモメはゴビズキンカモメであるとした¹¹⁴⁾。Stubbe と Bold は直ちにゴビズキンカモメがモンゴル人民共和国に分布する記録を報告した¹¹⁵⁾。

その後、Golovushkin は托瑞湖のゴビズキンカモメの繁殖群について多くの研究をおこなっ

ている¹¹⁶⁾。ゴビズキンカモメはソ連において出版された《レッドデータブック》に絶滅危惧種としてランクされている¹¹⁷⁾。

1980年、ゴビズキンカモメが再び発見(あるいは再確認)されて10周年に際して、Kitsonは当時知られているゴビズキンカモメの状況をまとめて論述した¹¹⁸⁾。ZubakinとFlintはゴビズキンカモメの生態について詳細な研究結果を報告している¹¹⁹⁾。

ゴビズキンカモメの発見、認知は新たな探索に情熱をよび、モンゴル西部の広々とした荒漠のゴビに関心が集まり、数年の努力は豊かな結果となった^{120~24)}。ソ連の再版《レッドデータブック》とその後の鳥類研究報告書のゴビズキンカモメに対する論述が加わった^{125~27)}。国際間の鳥類専門家と我が国のバードオッチャーが我が国の北戴河およびその周辺地域での活動で早くも発見して、ゴビズキンカモメが中国にも潜在的に分布している状況に注目した¹²⁸⁾。

上述の研究進展の最終成果は、1991年Duff等が世界におけるゴビズキンカモメの状況について里程碑ともいえる論文を発表した¹²⁹⁾。

3. 我が国のゴビズキンカモメ研究

Lonnbergが採集したゴビズキンカモメの標本はその後ほどなく、我が国の研究者により標本が採集され(1935年4月、塘沽)たが、しかし、残念なことに我が国の鳥類学者が塘沽で採集したゴビズキンカモメの標本もチャガシラカモメとしており¹³⁰⁾。添付され、精巧に画かれたデッサンもゴビズキンカモメの特徴を余すことなく示されていた¹²⁹⁾。その後、鄭作新の著書《中国鳥類分布名録》と《中国鳥類区系綱要》に、ゴビズキンカモメが独立種とされ、ゴビズキンカモメとチャガシラカモメの我が国における分布範囲を過去の記録から論述している。後の我が国の学者はこれを広く援用している。1989年の末に、我が国の北戴河およびその周辺地域で長年観察を続けてきた内外の鳥類研究者が動物研究所を訪れ標本を調べ、この事を指摘し、やっとかつての標本命名を訂正した。

これによる訂正にもとづいて1987年かつて内蒙古の伊克昭盟(今日のオルドス市)で張蔭蓀等によって採集され、胎内に成熟卵胞を持った雌ゴビズキンカモメの標本は、1990年伊克昭盟の東勝市と伊金霍洛旗¹⁾の境界にある桃力廟—阿拉善湾塩湖で相当大きなゴビズキンカモメの繁殖群^{133~34)}が発見され、これによって我が国のゴビズキンカモメ研究が大きく展開した。当然、北戴河の国際的研究を促進し、我が国のゴビズキンカモメ研究にも影響を与えた。

オルドスのゴビズキンカモメを囲む野外観察作業はこの数年来基本的な調査でオルドス高原におけるゴビズキンカモメの分布状況が明らかになった^{135~36)}。このほかゴビズキンカモメの生物学、生息環境の選択およびゴビズキンカモメ繁殖地周辺の鳥類相の研究も進み^{137~40)}、これらから同様の視点で、荒漠、荒涼とした蒙古高原の特有種としてゴビズキンカモメを見るべきで^{140,41)}、また、ゴビズキンカモメのオルドス繁殖群の発見およびこれによってもたらした世界的なゴビズキンカモメの繁殖分布の形態と生態の認識の変化の発展に、以下の4つの繁殖個体群がある。

- (1) カザフスタンのアラ湖²⁾とバル喀什湖³⁾を中心に中央アジア個体群。
 - (2) 蒙古高原の南西部ゴビ砂漠に散在するゴビ砂漠個体群。
 - (3) 中国、モンゴル、ロシア3国境界地域の幾つかの湖沼で繁殖する極東個体群。
 - (4) オルドス高原および周辺地域に分布するオルドス個体群
- ゴビズキンカモメが独立種としてすでに支持されているにも関わらずゴビズキンカモメとチャ

ガシラカモメの繁殖分布が重なっている部分があり、種として結果的に定論に至っていない。ゴビズキンカモメのオルドス繁殖個体群の野外研究観察中にチャガシラカモメがゴビズキンカモメの繁殖地へ侵入するのを観察し、両者が同じ場所で繁殖しているが交雑していない、これまで少なからずゴビズキンカモメの疑問点を残したまま完全な回答を与え、同時にまたゴビズキンカモメとチャガシラカモメが我が国で繁殖分布している状況が詳細に論じられてきた^[44~46]。

20世紀の90年代後半から相次いで発見されたゴビズキンカモメの報告は山西省、江蘇省、新疆ウイグル自治区等の各地におよび^[51~53]、内蒙古自治区中東部にゴビズキンカモメの繁殖群が発見された^[54,55]。

ゴビズキンカモメについて標識調査の結果が示され、少数の個体であるが22ヵ月で繁殖に参加していることが明らかとなった。飼育下のゴビズキンカモメの個体が性成熟に4~5年を要していることと比較される^[56]。

中国政府は《ラムサール条約》に加盟した。ゴビズキンカモメもまた湿地に生息する鳥類で、年来優れた保護対策がとられ、ことにオルドス個体群は逐次増加した。これは、ゴビズキンカモメのオルドス個体群が主に繁殖している湿地生息環境の評価作業をラムサール条約執行局が直接行ない^[47,48]、同時に、研究調査の連絡網によって提出された保護管理の今後のあり方、さらに今後荒漠とした地域の自然環境の総合的な保護方法と資金の提供方法を完成した^[49,50]。

2002年の初めラムサール条約執行委員会は中国オルドス国家級自然保護区を世界第1148号国際重要湿地(a wetland of international importance)と認定した。これは今までに無かったゴビズキンカモメ1種だけの湿地生息環境を対象とした国際重要湿地としたものである。これによって我が国のゴビズキンカモメの脅威に対する研究、保護実行の基本が実現した。

4. ゴビズキンカモメの渡り

客観的に、今日になってゴビズキンカモメの渡り行動、越冬、繁殖のための渡り経路は、総合的に依然として分かっていることは甚だ少ない。

ゴビズキンカモメに対する標識調査は前世紀の70年代から始まったが、回収状況は思うにまかさず、わずかな記録にとどまった。中国の個体群では、4ヵ月齢の当年幼鳥が遠く欧亜大陸を横断、トルコ、ブルガリアで回収された例がある。極東個体群の断続的な標識調査については、正式な回収報告を見ていない。

ゴビズキンカモメのオルドス個体群に対する標識調査を開始したのは1998年で、時間的に短いにも関わらず、回収例は豊富で、標識当年の幼鳥がバードオッチャーにより北戴河の浜辺で、連続的に観察され、近いうちにまた、塘沽において当年標識の幼鳥が観察された報告があった。いろいろと繰り返されたわずかな解釈の結果、90年代中期8、9月の時期に秦皇島附近で大量の当年幼鳥が観察され^[58]、30年代から50年代にかけて商都、康保(河北省張家口)、塘沽等の地で標本(オルドス個体群)が採集され、オルドス高原から渤海湾にいたる移動経路が認められた。今日もなお、わずかにその経路のみが知られ、しかし、分かっている実状から彼はただ、繁殖期後になって一つの経路に従って移動しており、本当に意義がある渡り経路(flyway)だとすることはできない。

わずかなゴビズキンカモメの幼鳥が冬季に香港で見られ^[59]、また、かつて日本列島でも見られている^[29,60]。本文の筆者は1999年初冬に広西省婺源^{ウツン}で当年の幼鳥1羽を見ている、韓国の沿海地方で近年持続的に越冬するゴビズキンカモメ個体群が見られ、その個体の大部分が当年生ま

れの幼鳥で、少数の成鳥も観察されておるが、標識されたゴビズキンカモメノ成鳥は観測されていない¹⁶¹⁻⁶³⁾。今までに最も大きな群れが見られたのは、江蘇省塩城の大豊から長江河口までの海浜地域で、ほとんどが幼鳥であった¹⁵²⁾。

以上様々な観察結果である程度予知されたように、当年の幼鳥は放射状に拡散している、この事から考えて、ゴビズキンカモメは我が国の多くの省で見ることができると思われるが、ただ、個体数が少ないことから識別することが容易でなく、かつて観察記録されていないだけと思われる。

もちろん何を言おう、今まで日本列島で観察されたゴビズキンカモメは当年生れの幼鳥とされるが^{129,60)}、恐らく全てとは認められず、しかも、迷鳥とされている¹⁵⁾。とりわけ鳥類の渡り行動中には、遺伝要素による制約、影響が考慮される¹⁶⁴⁾。

けれども今日ゴビズキンカモメ繁殖群の世界的分布状態は相当に解明されたが、ゴビズキンカモメの越冬地、あるいは越冬個体群、とりわけゴビズキンカモメの成鳥越冬個体群についてはなおも分かっていることが少ない。かつ今まで報告されたゴビズキンカモメ幼鳥の越冬群の最大個体数は百余羽に充たず¹⁵²⁾、しかも東アジア中北部の沿海地帯に多く、すべて様々と観察したところ、オールドス個体群の成鳥が春の末から夏の初めに、群れをつくって南方より繁殖地へ向って帰る現象は説明し難い。ゴビズキンカモメに対する標識調査の作業は遠からず成鳥の越冬地の所在を明らかにすることと思う。

5. ゴビズキンカモメの個体数変化と環境の影響

ゴビズキンカモメが独立種として認められてから 30 余年、我が国域外の幾つかの個体群は時により現れたり消えたり不安定な状態であることが知られている。その中、中央アジア個体群と極東個体群の個体数変化が最も大きい。中央アジア個体群は 1969 年から 1984 年間の個体数変化が 0~1200 番い(繁殖)、1985 年から 1989 年間の変化は 11~305 番い^{113,26,27,29)}、1998 年はわずかに 1 羽¹⁵⁾、極東個体群では 1967 年から 1985 年間の個体数変化は 0~1215 番いであった^{114,16,26,27,29)}。ゴビズキンカモメの個体数変化には水位の変化によるところが大きいと思われ、繁殖の主要な要因となっている¹¹⁷⁾。そのうえ、ゴビズキンカモメのゴビ個体群の消長は流動的な状況にある^{120,21,24)}。にもかかわらず、近年来ゴビ個体群の確認は甚だしく増えており¹⁶⁵⁾、この個体群の観察調査は頻繁に優先して行なわなければならない。

ゴビズキンカモメのオールドス個体群に対する年来の保護管理が良い成果を収めている状況を比較すると、90 年代初期には 1000 余巣あったが、1998 年 3594 巣、1999 年には水位が上昇し、わずかに 709 巣となり、2000 年低水位に回復したことにより 3587 巣となった。しかし、2001 年強度の乾燥状況で 2887 巣となった。1999 年は雨量が多く高水位となり、湖心の島の面積が激減したため、少量のゴビズキンカモメしか繁殖できなかつた。多くのゴビズキンカモメは周辺に分散して繁殖を行なつた。ここにおいて、オールドス個体群は 90 年代中後期にはゴビズキンカモメ世界全体の個体群中最大に発展し、その個体数は 60%以上となった。

しかしながら、オールドス個体群の今日直面している厳しい状況は、日照りが持続してゴビズキンカモメの主要繁殖地である湖心の島と湖岸が一つに繋がったことで、筆者のこれまでの野外観察で、ゴビズキンカモメ群は極めて個別的にわずかにある湖心の島以外に利用可能な環境で営巣繁殖している。これまでの経験で、2002 年ゴビズキンカモメオールドス個体群の繁殖状況の行方を予想することは結局困難であり、そのうえ、今後数年の気候変動の大勢とさらに進む荒廃化をもたらず変化を予測することはさらに難しい。

さらに大きい範囲から述べると、荒漠とした環境のもとで安定性に差がある湖心の島の生息環境で繁殖する鳥、ゴビズキンカモメのこれまでに記録された個体群の数の変化は理解でき、当然考えられることで、例えば、ゴビズキンカモメの標本が採集された額済納旗⁴でおおよそ70年代中期までゴビズキンカモメが分布していた可能性があるが、索果諾尔と噶順諾尔⁵(東西、延海にある)が次々に乾固し、90年代までそこにゴビズキンカモメが存在した形跡は全く無くなった。これもまたゴビズキンカモメの生息の変化について言及したもので、湖沼群が荒廃した環境へ進んだのも、おそらく総合的な環境保護のあり方に原因していると思われる^[49,50]。この1, 2年の弱水河⁶に再び水が流れ、延海がかねての生態に復旧するのは何時の日か。もちろん、気候変化によってもたらす環境変化は非常に大きくゴビズキンカモメ個体群の動態に影響するはずである。

HoseとScottによって各地の個体数調査結果の推計で、自然界のゴビズキンカモメの総数は10000~12000羽ほどとされ^[6]、この数字がもしゴビズキンカモメの有効な個体群数を指すならば、実際の状況に照らして適切である。

しかし、筆者は1990年代中期、ゴビズキンカモメの繁殖群に対する国際的な個体群同時調査と繁殖生息環境の長期的調査の項目案を提出したが、残念ながら各方面の反応が乏しく、実施に至らなかった。

過去30年を振り返ると、ゴビズキンカモメの認識のレベルは、この10年間に質的に飛躍した。これによってこれからの10年のゴビズキンカモメに対する研究はさらに進展することを期待する。

訳注

- *1 東勝市と伊金霍洛旗；内蒙古自治区40° N, 110° E附近位置する。
- *2 阿拉湖；カザフスタン46° N, 82° E附近に位置する塩湖。
- *3 巴尔喀什湖；カザフスタン46° N, 74° ~79° E附近に位置する淡水湖および塩湖。
- *4 額済納旗；内蒙古自治区42° N, 101° E附近に位置する。
- *5 索果諾尔と噶順諾；共に額済納旗の北部にある塩湖と淡水湖。
- *6 弱水河；降水の多い年に上記2つの湖水から流れ、乾燥が続くと水流が無くなる河。